

青いスピン

読んで見つける、新しい世界、新しい自分

読み物機関誌

秋
2026
第9号

「青いスピン」はコピーして、朝読書や授業でご使用いただけます。

我楽太

川角博

原亜樹子

伊藤ハムスター

村上由鶴

石崎和宏

乗代雄介

グレゴリー・ケズナジャット

富安陽子



青いスピンの目次

- | | | |
|----|-----------------------|---------------|
| 1 | 創作「メタモルフォーゼの夏」 | 富安陽子 |
| 6 | 創作「小鳥のさえずり」 | グレゴリー・ケズナジャット |
| 14 | 創作「人に迷惑をかけない」 | 乗代雄介 |
| 22 | コラム「3時のおかしラボ」 | 原亜樹子・川角博 |
| 25 | エッセー「見えないものを見えるようにする」 | 石崎和宏 |
| 28 | エッセー「アクスタ写真から考える」 | 村上由鶴 |
| 31 | イラストエッセー「学校あるある」 | 伊藤ハムスター |
| 32 | インタビュー「いちばんの趣味は読書」 | 我楽太 |

「スピン」って、何だか知っていますか？
本に付いている細いリボン、
しおりひものことです。

読んでいた本からはなれるとき、
ページにそつとスピンをはさんでおけば、
またいつでも、
その本の世界にもどることができます。

そして、「青」は、
青春や青空をイメージさせる色。
これから未来へ羽ばたくみなさんの色です。

「青いスピン」と名づけたこの冊子には、
物語からノンフィクション、イラストエッセーまで
さまざまな読み物を集めています。

青いスピンを手がかりに、
あなただけの新しい世界を見つけてください。

メタモル フォーゼの

夏

富安陽子
絵・久米火詩



塾の夏期講習の帰り道、神社の裏からハーモニカの音が聞こえた。陽葵はどきりとして足を止める。

辺りはもう暗くなりかけていたが神社裏の林ではまだセミがワンワン鳴いている。その声に混じって確かにハーモニカの音が聞こえたのだ。

幽霊……？ まさかね、と思ったが背筋がひやりとする。平和学習で町のお年寄りから聞いた話がよみがえる。

「あと一週間で戦争が終わるといふときですよ。日本軍の故障機が基地に戻る途中、神社の裏に落っこちてね、虫採りをした子が三人巻きこまれたの。」

亡くなった三人の中の一人は、話してくれたおばあさんの兄だった。おばあさんはそのときまだ四つ。お兄さんは十三歳。陽葵と同年だ。

「優しくて、ハーモニカの上手な兄だった。」とおばあさんは言っていた。

幽霊……のはずはない。でも誰がハーモニカなんか吹いているんだらうと気になって、陽葵は神社裏の林をのぞきに行ってみた。

を見比べて、ちよつと黙りこんだ。

「戦争が終わるちよつと前、ここで子どもが死んだの知ってる？」と、やがて樹が聞いた。

「知ってるよ。」と陽葵はうなずく。

「日本軍の飛行機が落っこちてきて、虫採りしてた子が三人巻きこまれたんでしょ？ 平和学習のとき、亡くなった男の子の妹のおばあさんが話してくれた。」

樹がまた口を開く。

「死んだのは三人だけど、虫採りしてたのは四人で、またま離れたとこにいて助かったのが、おれのひいじいちゃんだ。ひいじいちゃんは去年の秋九十四歳で死んじゃったけど、それまで毎年、八月になると、ここにハーモニカ吹きに来てたんだ。……で、亡くなる前にこのハーモニカ、おれにくれたんだよ。」

「ハーモニカが上手だったの？ ひいおじいちゃん。」

形見のハーモニカを見つめて樹がうなずく。

「うまかったよ。イツキのほうがもつとうまかったって言うってたけど。」

林の脇の道路の街灯が、木陰のベンチに光を投げかけている。そのベンチに座ってハーモニカを吹く人影が見えた。ハーモニカのメロディがさつきよりずっとはつきりと聞こえる。どうやらオールディーズの曲のようだ。それに、どうやらあまり上手ではないらしい。しょっちゅう、引っかかったり、つかえたりしている。

近づいていくと足音に気づいたのか、ハーモニカの音がやんだ。

街灯の光の中、顔を上げたその子を見たたん、陽葵は「あつ。」と声を上げた。

ハーモニカを吹いていたのは森樹。同じクラスの男子だった。陽葵と樹は小学校は別々だったが、小さい頃同じ幼稚園に通っていた。

「相原陽葵、こんなとこで何してんの？」と、フルネームで名前を呼んで樹が質問した。

「塾の帰り。樹くん、じゃなくて森くんこそ何でここでハーモニカなんか吹いてんの？」

陽葵がたずねると樹は手の中のハーモニカと陽葵の顔

「え？ イツキって樹くんのこと？」

「ちがうんだな。死んじゃった友達の名字だよ。五木勇一っていうんだって。別に狙ったわけじゃないだろうけど、ひ孫のおれは樹。」

「そっか。何か、責任ていうかつながら、感じちゃうね。だから、ひいおじいちゃんの跡を継ごうって……。やっぱ、りっぱだわ。」

ハーモニカは下手だけど、という言葉葉を飲みこんで陽葵はそう言った。

「ここでハーモニカ吹いてるのには、ほかにも理由があるんだけどな。」と樹が言う。

「家で吹いてると、『下手くそ。』って、めっちゃ迷惑がられるし、それに、もう一つ。この時間ここにいと、いい物が見れるから。」

「いい物？」と、思わず陽葵は聞き返した。

「セミの羽化。」

急に勢いこんで樹が答える。

「メタモルフオーゼだよ。地面の下から出てきた幼虫が

殻を破って大変身するところって見たことある？ すつごくきれいなんだ。」

樹の目が輝いているのを見て、陽葵はちよつと笑ってしまった。

「やっぱ、虫、好きなんだね。」

「うん……まあ……。」

笑われたと思ったのか、気まずそうに目をそらす樹に陽葵は問いかけた。

「あのさ、幼稚園の年少組のとき、あたしにプレゼントくれたの覚えてる？」

樹はぎくりとしたようだった。

「何だっけ？」と不安そうに首をかしげる。

「砂の詰まったビニール袋。『ひまりちゃんにあげる。』って言うから『これ、何？』って聞いたたら、『アリ。』だって。『アリつかまえたから、あげる。』って。生まれて初めて男子からもらったプレゼントがアリだよ、袋詰めめ。あと、セミの抜け殻で作ったネックレスとか、緑色のカメムシとかもくれたよね。」

セミの抜け殻のネックレスをくれた男子と二人で。

樹の言ったとおり、幼虫は間もなく変身を開始した。茶色い幼虫の背中が割れて、そこからうす緑がかった白い妖精みたいなセミの成虫が姿を現したとき、陽葵は思わず「きれい。」とささやいた。熱心に羽化を見守っていた樹が、かがめていた腰を伸ばし「だろ？」と得意そうに笑う。幼稚園のときクラスでいちばん小さかった樹の身長がとくに自分を追い越していることに気づいて陽葵はどきつとした。

「メタモルフォーゼだ。」

陽葵のつぶやきに「何？」と樹が首をかしげる。いつのまにか大変身をとげていた幼なじみから「何でもない。」と目をそらし、陽葵は質問する。

「さっき吹いてたの、何て曲？」

「スタンド・バイ・ミー。」と樹が答える。

「あ、知ってる。吹いてみてよ。」と言うと、「だめ。まだ練習中。」という返事が返ってきた。「それにセミの羽化の邪魔になるし。」

さらに続けようとする陽葵の言葉を「あっ！」と叫んで樹が遮った。

「何？ どした？」

ぎよつとする陽葵に、樹が目の前のクヌギの木を指差してみせる。

「ほら、そこ。セミの幼虫。」

「えっ？ どこ、どこ？」

ベンチから立ち上がった樹が歩み寄るクヌギの下に陽葵も近づいていった。

「しいっ。」と合図する樹の横からそつとのぞき込むと、ごつごつした幹の途中でじつとしている幼虫が見えた。

「地面から出てきて、ここまで上ったんだ。」と、ひそひそ声で樹が言った。

「もうじきメタモルフォーゼが始まるから驚かさないと静かに。邪魔が入ると途中で羽化するのやめて、死んじゃうから。」

「分かった。」と陽葵も、とびきりのひそひそ声で応じる。成り行きでセミの羽化を見学することになってしまった。

セミに気をつかう樹のことがおかしくて、陽葵は笑いたくなくなった。林にたまる熱気をかき混ぜて夕暮れの風が渡る。林のこずえが騒ぐ。

「樹くんのひいおじいちゃんてさ、死んじゃった友達のこと思い出すために毎年ハーモニカ吹いてたのかな？」と陽葵が言うと、

『「おまえたちのこと忘れないぞ。」っていう意味なんだってさ、ハーモニカ吹くのは。」と樹が答えを返した。

「そっか。」と陽葵はうなずく。「だから今度は樹くんがハーモニカ吹くんだね。その子たちのこと忘れないように。」

しわくちやの白い羽を伸ばそうとしているセミを見つめながら陽葵は思っていた。

私も覚えておこう、と。

死んだ子たちのことを。戦争のことを。そして、今日、夏の日のメタモルフォーゼのことを。

いつのまにかセミの声はやんでいた。

小鳥のさえずり



グレゴリー・ケズナジャツト

絵・小林マキ

音がした。キーンと、まるで自転車のブレーキを急にかけたようなきしんだ音だった。朱里は寝室の窓に駆けていった。事故でもあったのか、と思い、外をのぞいた。しかし見てみると自転車も人も見当たらない。

朱里とお母さんが新しいマンションに引っ越してきて、まだ一週間しかたっていない。部屋はマンションの一階にあつて、裏には小さな庭がある。今はまだ手入れされていない芝生しかないけれど、隣の部屋の庭にはいろんなものがある。丸いテーブルと折りたたみ式の椅子。古そうな物干しロープ。そして軒先から、小さな皿のようなものがぶら下がっている。

キーン。

あそこだ。皿の端っこに小鳥が止まっている。顔と翼が黒く、胸は鮮やかなオレンジ色だ。せわしく頭を左右に回し、辺りを確認してから、また小さな体にしては意外と大きな鳴き声を放ち、皿から何かをついばんだ。

「君は何をしゃべっているの？」と朱里はぼんやりと問いかけた。

前に住んでいた部屋には、鳥は来なかった。高層マンションの十五階で殺風景なベランダしかなく、そもそも東京の真ん中だったから辺りでは鳥を見かけなかったのかもしれない。燃えるごみを出す日にマンションの前に集まってくるカラスがせいぜいだった。一度、夕方に川縁を歩いていたらカモメの声が聞こえた気がしたけれど、海から迷い込んできたのかもしれない。

でもこの辺りには森がたくさんあるから、きっと動物もいろいろいるだろう。ほかにどのような鳥が見えるのか。

「朱里、何してるの？」

お母さんのアシユリーが部屋に入ってきた。いつものように英語で話しかけてきて、朱里も同じく英語で答えた。

「鳥を見てるの。」

お母さんは窓に近寄ってきた。

「あ、ほんとだ。かわいい小鳥がいるのね。新しいご近所さん。さあ、早く準備して。」

この部屋に引越してきた当日から、お母さんは、隣人へのご挨拶をしないと、と繰り返言っている。本当は初日にするつもりだったが、どのような日本語を使えばいいか、確認しようとスマートフォンで検索すると、挨拶の際に手土産を渡す習慣があることを知り、やめた。まずはちゃんと手土産を買っておこう、と。

「引越しの挨拶は古い文化じゃない？」と朱里はそのときに言った。「最近はやらない人が多いらしいよ。」

「お母さんは古い人間だから、やりたいの。」

「お母さんの国ではそんな習慣はないでしょ？」

「でもこの国ではするでしょ？ これからここは私たちのホームだから、お隣さんと仲良くしないと。」

お母さんはカナダで生まれて、大学を卒業してから日本に渡ってきた。朱里は二回しかカナダを訪れたことがないけれど、お母さんのおかげでその国の文化と言葉について詳しかった。日本人のお父さんを持ち、カナダ人のお母さんを持つ朱里には、そのどちらの国も故郷と感じてほしい。それはお母さんの考えだったみたいだ。

メッセージを注意深く書いていた。

「挨拶をするならメッセージカードは要らない？」

「不在かもしれないよ。それとも忙しくて出てきてくれないかもしれない。そうなったらこの袋を置いて帰ってくる。」

お母さんの肩越しに、朱里はメッセージカードの文章を眺めていた。お母さんの字は独特で、朱里が書くのとは明らかに違う。朱里は別に字が上手というわけではなかったけれど、上手とか下手とか、そんな問題ではなかった。朱里が書く字は、小さい頃から練習をさせられた人のものだった。大人になってから日本語を覚えたお母さんの文字は、どことなく雰囲気が違う。

「私が書けばよかったのに。」

「これはお母さんの仕事でしょ？ 子どもにお願いするわけにはいかない。」

「でも……。」

小さいとき、お母さんの日本語を何とも思わなかった。発音がお父さんやそのほかの周りにいる大人とはちよっ

お父さんがまだいた頃、朱里の両親はそれぞれの文化を教える作業を分担していた。家の中でお父さんと日本語を話して、お母さんとは英語を話した。クリスマスにお母さんといっしょにクリスマスツリーを飾り、初詣のときにはお父さんといっしょにさい銭箱の前で手を合わせた。二人は違う背景、違う言葉、違う伝統を持っていた。でも朱里にとっては、その全てが自分の家庭の中の文化だった。

お父さんがいなくなった後、お母さんの仕事は倍になった。朱里の英語教育を怠らず、この国の文化と習慣を朱里に教えるようにも努力した。近所への挨拶にこれほどこだわっているのも、そのためなのではないかと朱里は思った。大人のマナーの見本を娘に示したかったのだろう。

インターネットで読んだ情報に従って、お母さんは手土産のハンドタオルと洗剤を用意した。それから近くの百元ショップで手提げ袋とメッセージカードを買ってきた。昨夜、お母さんは食卓に座って、一枚一枚に短い

と違うし、ときには間違ったことを言ったが、ずっとその言葉を聞いてきた朱里にとっては、それはお母さんの言葉であって、お母さんと同じようにいとおしかった。

でもある日、お母さんは学校の参観日に来た。人懐っこく、いつも積極的に人に話しかけるお母さんは同級生のお父さんとお母さんや、先生と楽しそうに話していたが、みんなの親たちが帰った後、同級生の男子が、お母さんのしやべり方を大げさにまねして、彼の友達を笑わせた。それを聞いた朱里はつらかった。お母さんを守りたかった。お母さんは日本語だけではなく英語もできるよ、英語どころか国語でも良い点数が取れない子が何でおもしろがってるの？ 心の中で朱里はそうつぶやいたが、何も言わなかった。言う勇氣はなかった。

以来、朱里はある不安を追い払うことができなかった。お母さんの言葉は、ほかの人にも笑われているのか。そう思うといったまねなかった。自分の独特な言葉を気にせず、常に人と会話したがるお母さんのことが急に恥ずかしくなった。静かにすれば笑われる心配はないのに。

お母さんといっしょにマンションの部屋を回って、知らない人一人一人と日本語で話しているところを隣で聞くことを想像すると、胃が少し痛くなった。

「さあ、行こう。」

朱里は諦めて、不安を顔に出さないように注意しつつ、立ち上がった。二人は玄関で靴を履いて部屋のドアを出た。

「本当は左と右の部屋、そして上と下の部屋に行くのが普通だけど、私たちは一階だから三部屋だけだね。」

「ラッキーだね。」

「まずは上の階に行こうか。」

マンションは大きくなかった。三階建てで、各階に五部屋がまっすぐ並んでいる。お母さんの後をついて二階の通路に続く外階段を上った。程なく自分たちの部屋の上の部屋のドアにたどり着き、お母さんはチャイムを押した。ピーンポーン、という音がドア越しに聞こえたが、その後はしんとしていた。

誰も出てこない。

さんはため息をつき、手提げ袋を取っ手にかけ始めた。

するとドアが開いた。部屋の中から、男性の顔が突き出た。

「はい？」

六十代か、それとももっと年上か。年齢は朱里には分からないけれど、お母さんより年上なのは確かだ。髪の毛は白くなっていて、目もとに細かいしわがたくさんあった。お母さんの顔と朱里の顔を交互に見ていて、少し慌てているような様子だった。

お母さんは日本語に切り替えて、話し始めた。

「初めまして。このたびは、あの、隣の一〇三号室に入居しました、あの、サンダーズと申します。これからご迷惑をかけることがあるかもしれませんが、あつ、どうぞよろしくお願いいたします。」

不在と思っていた住人が急に現れて驚いたのか、それともインターネットで読んだ例文を必死に思い出そうとしていたのか、お母さんの日本語はいつもより少しぎこちない。朱里は思わず顔をしかめた。

「いないかな。」と朱里は言ってみた。

「そうみたいだね。」お母さんは残念そうに言った。ドアの取っ手に一つの手提げ袋を丁寧にかけた。「やつぱりメッセージカードを用意しておいてよかったね。一階に戻ろっか。」

また階段を下りて、自分たちの部屋の右側にあるドアの前に止まった。お母さんは同じくチャイムを鳴らした。ピーンポーン。しーん。前と同じように、応答がない。「みんな、出かけてるかしら。」お母さんはまた手提げ袋を取っ手にかけながらそう言った。「もうちょっと遅い時間にすればよかったかも。」

朱里はうなずいたが、内心、喜んでいた。三部屋のうち二部屋は不在。あと一部屋だけだ。今までの幸運がそのまま続けば、挨拶のやりとりを聞かずに済むかもしれない。

自分たちの部屋の前を通って、左側のドアの前に来た。お母さんはチャイムを鳴らした。ピーンポーン。今度も誰も出てこないように、と朱里は頭の中で願った。お母

でも男はそんなことを気にしていない様子だった。むしろお母さんの言葉を聞いて、緊張が和らいだようで、ほほ笑んだ。男が笑うと、目もとのしわがさらに増えて、いっそう深くなった。

「ああ、そうですか。山口です。こちらこそよろしくお願いたします。」

お母さんは練習した言葉を言い続け、手提げ袋を両手で渡した。

「つまらないものですが、よろしければ。」

山口さんはお母さんの袋を受け取った。

「どうも。」

山口さんは手に持っていた袋を眺めていた。早く話を終わらせて部屋に戻ろう、と朱里は願っていたけれど、そこで山口さんは予想外なことを言いだした。

「よかったらお茶でも。」

さすがにお母さんも遠慮した。

「いえいえ。」

「どうぞ上がってください。」あたかもお母さんの言葉

が聞こえなかったかのように、山口さんはドアを開けたまま部屋の中へ戻っていった。

朱里はお母さんの顔を見て、帰ろう、と声を出さずに口を動かしたけれど、お母さんはそれを無視して、靴を脱ぎ始めた。しかたがなかった。朱里はお母さんの後について部屋に入った。

山口さんの部屋は朱里たちが住んでいた部屋と全く同じ間取りだった。でも彼が長年ここに住んでいることが、室内を見ると分かる。全ての壁にアートや写真が飾つてある。リビングに本棚が四台もあって、どれからも本があふれていた。

山口さんがキッチンからお茶を持ってきた。朱里とお母さんはゆつたりとしたソファに座り、山口さんは隣の椅子に座った。

「どちらから引越してきたんですか。」

「東京です。」とお母さんは返事した。

「はあ。」と山口さんは頭を上下に動かしした。「東京ねえ。ここはずいぶん違う雰囲気でしょう。」

この時期はジョウビタキが来てる。」

「ジョウビタキ？」お母さんはその言葉の意味が分からなかった。朱里も初耳だった。

「あそこに小鳥がいるでしょ？ あれはジョウビタキというんだ。渡り鳥でね、毎年冬になるとロシアや中国から日本にやってくる。」

「すごいですね。」お母さんは本当に感心したようだった。「あんなに小さいのに。」

「ええ。小鳥にしてはとんでもない距離でしょ。でも毎年、必ずやってくる。」

あたかも自分が話題になっていることに気がついたかのように、ジョウビタキは鳴いた。キーン。山口さんとお母さんは静かに笑った。そして朱里もほほ笑んだ。いつのまにか緊張が少し解けていた。

不思議なことだった。挨拶しにいう、とお母さんに

「ええ。」お母さんははにかんだ笑顔を見せた。英語で話すときは強く見えるのに、日本語となると、急におとなしくなった。英語で話すときと日本語で話すときを両方見ている朱里にとっては、そのギャップがいつも不思議に感じられた。でも考えてみると、そんなところは山口さんには分からないだろう。

また沈黙が訪れた。お母さんは今言葉に困っているのか、話の続け方を考えているのか、朱里は心配した。

お母さんはいきなり何かを思いついたような顔つきになった。

「あ、バードフィーダー。」

「え？」山口さんは驚いた表情だった。

お母さんは右腕を上げて、部屋の奥の引き戸越しに見える裏庭を指差した。

「バードフィーダーを出しているのは山口さんですね。実は私と娘は、見ていました。」

「ああ。」山口さんは安心したように、静かに笑った。「あれか。この辺りは鳥が多くてね、なかなかおもしろい。

言われたとき、朱里は部屋から出たくなかった。窓越しに鳥を見続けたかった。人と話す、ましてや人の部屋に入り込むなんて、考えるだけで緊張する。言葉がときどきままならないお母さんだって、きつと緊張したにちがいない。ひよつとすると朱里よりも緊張していたのかもしれない。

山口さんとお母さんの会話が軌道に乗ったらしく、二人は楽しそうに話していた。朱里は楽になって二人の声を聞いていた。でも彼女はときどき、庭で鳴き続けるジョウビタキに目をやった。小鳥なのに、長旅をする。小鳥なのに、声が大きい。大陸にいたときも、同じような鳴き声をしていたのだろうか。それともこうしてこの列島に渡り、ここにいるよ、とどうしても伝えたかったのだろうか。

人に迷惑をかけない

乗代雄介

絵・石橋 瞭

ミノルくんとはくは保育園からの仲良しで、今年、そろって六年生になった。今日は土曜日、ミノルくんの家で遊んでいたけど、早めのお昼ご飯を食べてすぐに外へ追い出されてしまった。

近所は池と田畑と小さな森だらけ。大きな公園で遊ぶとかということになって、池と花壇の間を抜けて、畑の中の道を行く。農薬用の広い畑じゃなくて、近所の人たちがこちんまりとやっている所だ。野ざらしの農具や肥料袋、水をためた古い浴槽がそこら中であって、けっこう適当な感じ。

半分ほどいった辺りで、遠くから歩いてくる小さな女の子が見えた。何か言っているけど、かすれ声で聞こえづらい。近づこうちに、はつきり聞こえる瞬間が来た。

「お兄ちゃん、どこー。」

小学校低学年ぐらいだけど、学校では見たことがなかった。ミノルくんがぼくを肘でつついて言った。

「迷子かな？」

ミノルくんは、いつもさがすものをさがしている。去

年の秋分の日からだ。あの日、ぼくたちはリードを引きずって歩いている年寄りの迷子犬を見つけた。リードを取って家をさがし、近所の人に教えてもらって、とうとう飼い主さんに引き渡した。よかったんだけど、それがよくなかった。あれ以来、ミノルくんは何かをさがすことに目がなくなってしまったのだ。

ちなみに、ぼくはそうでもない。でも、困っている人がいたら協力しなきゃとは思う。だから今回、ミノルくんがすつ飛んでいくのは納得だった。

「迷子になったの？」とミノルくんが声をかける。

女の子は立ち止まった。横に、にこった水がたつぷりたまっている小さな浴槽があって、そのふちと同じくらいの高さからぼくらを見上げる。泣きべそで、への字に口を結んだまま首を振った。

「じゃあ、お兄ちゃんが迷子？」

変な質問をするミノルくんにまた首を振ってから、女の子は言った。

「かくれんぼ。」

ミノルくんは残念そうな顔をしたけど、質問は続けた。

「見つからないんだ？」

女の子はこっくりうなずく。

「もしかして、ほんとにいなくなっちゃったとか？」

女の子の顔がさらにゆがんで、ぼくはあわてて口を挟んだ。

「ねえ、どこまでとかいつまでとか、かくれんぼのルールはあるの？」

「畑のどこまで。」と女の子は答えた。「私が花壇にもどつたらおしまい。お兄ちゃんが出てくる。いつもそう。」

「じゃあ、このまま行けば会えるんだ？」

女の子はまたうなずいて、そのまま振り返りもせず歩いていった。ぼくたちは立ち止まったまま、しばらくその後ろ姿を見ていた。

「迷子じゃなかったか。おしかったなあ。」

「おいしいことはないけど。」

「でも、これでそのお兄ちゃんつてのが出てこなかったら……。」

ぼくらは意味が分からず、ただその姿を見ていた。

「あ、ごめんごめん。」と相手は続けた。「ぼくが、あいつの言つてたお兄ちゃんだよ。」

「あつ。」とミノルくんが地べたから言う。「さっきの子がああなたの妹——。」

「めいっ子だけだね。」

「え、じゃあ。」とぼくもおそろおそろ口を開いた。「かくれんぼしてて、そこにかくれたってことですか……？」

「そうだよ。君たちも大人になったらまねするといい。」
軽く首を振ってから「服、着たまますよね？」と質問を続ける。

「見たら分かるだろ。」

「何で、どこまでするんですか……？」

「本気でやらなきゃおもしろくないからね。けっこうたいへんなんだよ。水が澄んでるからわざと底の泥をまい上げたり、鼻と口だけ出して息を吸ったり、君たちがそんな所で立ち止まるからそれでもできなくなったり。」

どうやら、まだあきらめていないらしい。とはいえ、ぼくも心配ではあった。どんどん小さくなる後ろ姿を見つめながら、お兄ちゃんが現れるところまで見届けたほうがいいんじゃないかと考え始めた。

そのとき、バシヤツと小さな水音がした。

浴槽——目をやった瞬間、そのふちにごつごつした塊が二つ現れて、ヒツと声が出た。にごった水が盛り上がり、白くくずれて、外にあふれる。その真ん中からすごい勢いで、水しぶきとともに何かが飛び出してきた。

「うわ！」

近くにいたミノルくんは飛びのいて尻もちをつき、ぼくは立ち尽くした。

人間の、しかも大人だった。浴槽の中で、Tシャツからにごった水をしたたらせ、顔を何度もぬぐいながら、大きく肩で息をしている。しばらくそうした後で、ゆっくりぼくたちの方を向いた。

「サエコに親切にしてくれて、ありがとう。」

ザバリと浴槽から上がると、はだしだった。Tシャツとハーフパンツをしぼって、離れた所にある切り株に歩いていく。スマホやサンダルが置いてあった。

「こういうヒントは出してるんだけどね。」

この世にはとてつもなく変な人がいるものだ。ようやく立ち上がったミノルくんの鼻の穴がふくらんでいるのを見てしまった。

「遊びはルールをきちんと決めたうえで楽しむものだ。ただ、決めるまでもなく絶対に守るべきルールがある。」
そこで言葉が途切れたので、ぼくは聞いた。

「何ですか？」

「人に迷惑をかけない。」

「でも。」と思わずぼくは言った。「この水をためてた人には、迷惑だと思います。」

「着眼点はすばらしい。けど、ここはうちの畑なんだ。」
返す言葉もないぼくに、相手は高らかな声で続けた。
「生きていれば、人に迷惑をかけてしまうことなんていくらでもある。それは互いに許し合ったり支え合ったり

すればいい。だからこそ、遊んでるときぐらいはそうならない練習をしておこうってのが、ぼくの信条なのさ。」

「お兄さん！」

突然、ぼくの耳もとでミノルくんの大声が響いた。

「おれたちとも、かくれんぼしてください！」

それから、三人でサエコちゃんのいる花壇にもどった。

「サエコに親切にしてくれたお礼だ。」

そう言うってから、お兄さんは淡々とかくれんぼのルールを説明した。範囲はU公園の敷地内。サエコちゃんを家へ送って着替えや食事もあるから、一時間後の十二時五十分に公園の南門に集合。お兄さんが公園に入った後、一時にぼくたちが公園に入る。

「こちらはかくれ場所は変えない。大きな移動はしないと言ったほうが正しいかな。で、そのぼくに向かって『見つけた。』と紳士的に言った瞬間、君たちの勝ちだ。かくれんぼは終了、無駄話せず即解散。いや、確認のために『まいりました。』ぐらいはこちらも紳士的に言おう。

すごく疲れていた。池にはショウブがいっぱい生えていて、水もにごっている感じだ。普通なら気にも留めないけど、ぼくたちは顔を見合わせた。まさかと思っただけ、ミノルくんが〈池に入るな〉の立て札を見つけて、やっ

と安心した。

ぼくたちは、やみくもにさがすより迷惑になることをつぶしていくほうが、お兄さんに近づけるんじゃないかと考え始めた。ちやうどすぐそばに公園マップがあった。立ち入り禁止の場所に入るのは迷惑。トイレに立てこもるのは迷惑。芝生に穴を掘るのも迷惑。遊具エリアに大人が入るのは迷惑か微妙だから、二人で行ってみた。遊んでいる子も多いし、遊具の中にも見当たらなかった。

それから、いろんな場所で迷惑について考えながら、二人で公園を一周した。広いから、三時、四時と、どんな時間が過ぎていって、ぼくたちはまた池にもどってきた。行く所さえ思いつかず、ベンチにぼんやり座っているだけ。やっぱ、あの人にはかなわないんだろうか。あきらめかけたとき、マップの一つの場所が急に目につ

それでおしまい。どうだい？」

「分かりました。」とぼくらは言った。

「見つからない場合の制限時間は夕方五時。チャイムが鳴り始めた瞬間、ぼくの勝ち。再び南門に集合だ。」

こんなに本格的なかくれんぼは初めてで、ぼくもさすがにわくわくしてきた。

「それから、絶対のルールが一つ——。」

ぼくたちは三人同時に言った。

「人に迷惑をかけない。」

白いポロシャツを着たお兄さんが入ってから十分後、だいたい円形の形をしたU公園を、南門からぼくは右回り、ミノルくんは左回りに分かれてさがした。真ん中の芝生広場にはかくれられないだろうから、東側にある散策ができる森と、西側の休憩所とかトイレとか資料館とか建物が並んでいる辺りがあやしい。

北にある小さな池で、予定していた二時にミノルくと落ち合ったときには、しらみつぶしにさがしたせいで、

いた。ぼくはミノルくんに言った。

「お兄さん、公園の敷地内って言うってたよね？」

西側の小さな資料館を指差す。町の歴史とか昔の暮らしとかを紹介している所だ。その中には、最初ミノルくんも入らなかった。

「この中も、敷地内じゃない？」

「でも、あそこにかくれてたら迷惑かかるよ。」

「でもさ。」とぼくは返した。「このかくれんぼって、最後に『見つけた。』って言うだけで終わりなんだよ。紳士的とか無駄話をしないと変なルールだと思っただけで、中で見つけても迷惑にならないようにしたのかも。」「確かに。」とうなってから、ミノルくんは「でもだめだ。」と言った。「あそこ、入るのにお金かかるもん。子どもはタダだけど。」

「だからだよ！」ぼくは興奮して叫んだ。「お兄さん、人に迷惑はかけないって言ったよね。」

「ていうか、そればかり——。」

「たぶん、子どももお金がかかるんだったらあの人

ここにかくれようとはしないよ。ぼくらにお金を使わせるのは迷惑だから。でも、自分がお金を払うのは、自分の服がびしょぬれになるのといっしょだからいいんだ。人に迷惑はかけてないから。」

ミノルくんの顔が一気に輝いた。

「おれたちも、見学目的で中に入ろう！」

西に向かつて一目散に走っていくミノルくんを追いかける。時刻はもう、四時三十分を回っていた。

古めかしい資料館の入り口で、走りから歩きに切り替える。受付の奥に紺色の服を着た眼鏡の人が見えたけど、入ってきたのがぼくたち子どもだと分かれると興味なさそうに下を向いた。大丈夫だ。

中はしんとしていた。ガラスケースの並んだ部屋の蛍光灯は頼りない。骨とか土器とかの展示を見て進みながら、奥のさらに薄暗い部屋だとうなずき合う。そこには、昔の農家の様子が再現されている。踏み固められた土みたいな床は、意外と足音が響いた。部屋の中に家の一部

もってるのかも。」

「そんなことはないと思うよ。」資料館の人は笑いながら懐中電灯をつけた。「この時間になると本当に暗くて、申し訳ないね。」

まぶしくて、照らされた戸に目を向ける。足音が響く。「どれ。」大人が力をこめても、戸は開かなかった。「反対側に何かあるな。」

資料館の人は金属製の定規みたいなものを取り出して、戸のすき間に差しこんだ。それを何度か上下させると、中で何かがはじき飛ばされるような音がして戸が開いた。するりと中に入ったと思ったら、すぐに声がした。「ははあ、誰かが戸を閉めちゃった拍子に掃除用具が倒れて、ほうきがつつかい棒になっちゃったんだ。」

ミノルくんは説明そっちのけで、戸のすき間から中をのぞき見ようとしていた。

「ちよっと君、こっちが出るからあわてないで。」

「あ、すみません。」

「あと、中の展示物には触らないように。」

乗代雄介 作家。著書に「旅する練習」「パイヤ・マイヤ」「それは誠」などがある。

が埋めこまれた感じで、木の壁に引き戸が付いている。横にへ入ってみよう」の張り紙。

戸に手をかけると、ちよっとしか開かない。何かが引っかかっている感じた。

「絶対この中だ。」とミノルくんはうれしそうだ。

戸を閉めきるのは迷惑な気もしたけど、もし中にいるとしたら、ぼくらが来てあせっているのかも。戸をガタガタさせながら、いよいよだという感じがした。

「ここで遊んじやいけないよ。」

突然の低い声にはっとして振り向く。部屋の入り口に人が立っていた。向こうの部屋のほうが明るくてよく見えないけど、受付にいた資料館の人だ。

「いや、あの――。」

口ごもるミノルくんの代わりに言った。

「見学したいんですけど、開かないんです。」

「え？」と資料館の人は言った。「そこは、そもそも閉めてないはずだけど。」

「もしかして。」とミノルくんが言った。「誰かが閉じこ

ミノルくんが一応の返事をしながら入れ替わるように中に入っていくと、資料館の人のため息が聞こえた。

「ごめんなさい。」ぼくは頭を下げて謝った。

「いやいや。」その声にとげはなかった。「こちらこそ迷惑をかけてすまなかったね。あんまり時間はないけど、ゆっくり見学していつて。それじゃ。」

ぼくが少しほっとした、そのときだった。

「見つけた。」

さらに薄暗い戸口の奥から、ささやくようなミノルくんの声がした。

あわてて入ろうとして驚いた。戸のすぐそばにミノルくんがいて、こっちを向いていたからだ。でも、ぼくのこととは見ていなかった。その鋭い眼光は何かを突き刺すように、ぼくの後ろにまっすぐのびていた。

『迷惑』。ミノルくんは声をひそめたまま言った。「その言葉でやっと気づきました。」

少しして、「まいりました。」と小さな声が響いた。

きれいな層ができる セパレートドリンク



セパレートは英語で「分かれる」という意味だ。

セパレートドリンクは、ジュースと紅茶の2層に分かれる「セパレートティー」というお茶のアレンジだよ。
かき氷シロップの代わりに、カルピス(うすめて飲むタイプ)でも作ってみよう。



3時の おかし ラボ

3時のおかしラボへようこそ!
作って学べる簡単レシピと
理科のギモン

レシピ著者: 原亜樹子
理科解説著者: 川角 博



材料 (300ml容量のグラス1個分)

かき氷シロップ、またはカルピス…大さじ2(30ml)
ジュース(果じゅう100%)…3分の1カップ(約65ml)
炭酸水…2分の1カップ(100ml)
氷…グラス1個分

▼かき氷シロップとカルピス、ジュースは、好きな味で作れるよ。

▼ジュースは、必ず果じゅう100%で、果肉の入らないものを使ってね。砂糖や果肉が入っていると、かき氷シロップと混ざってしまって、きれいな層ができないんだ。

道具

計量カップ、計量スプーン、グラス、 Tong (なければ、スプーン)、ふきん

はじめにやること

- 材料を量る。
- 冷とう庫に氷を用意する。

作り方 材料を混ぜる



1 グラスにかき氷シロップを入れて、かき氷シロップがはねないように、Tongで氷を静かに入れる。氷は、グラスのふちより少し下まで入れる。

2 液体どうしが混ざらないように、氷の上にそっとジュースを注ぐ。グラスをゆすらない。

3 液体どうしが混ざらないように、氷の上にそっと炭酸水を注ぐ。



もっと
知りたい人は



子どもだけでつくれる 焼かないお菓子
原亜樹子・著

子ども料理本の、決定版! 小学生から使えるレシピのほかに、おもしろい豆知識もいろいろ!
ISBN: 978-4-487-81818-1



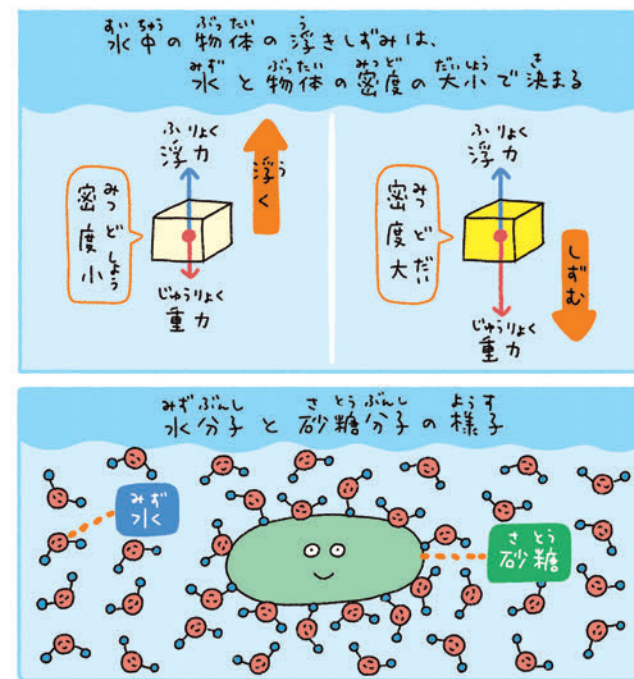
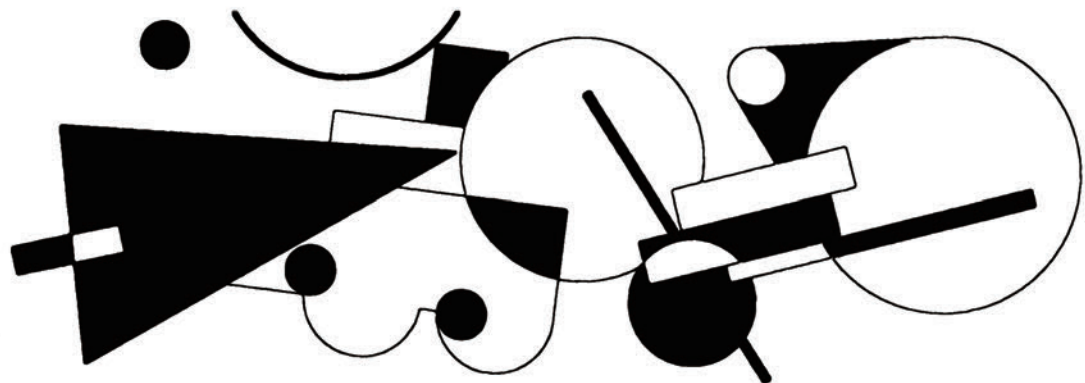
「芸術の本質は、見えるものをそのまま再現するのではなく、見えるようにすることにある。」＊
これは、画家のパウル・クレーが残した有名な言葉です。みなさんは、ふだんどのようにものを
見ますか。例えば、毎日通っている通学路を思い浮かべてみてください。いつも見ている景色なので、
何気なく通り過ぎていくかもしれません。でも、少し立ち止まってよく見てみるとどうでしょう。朝の
日差しで光る葉っぱの色、風にゆれる木の枝、季節によって変わる空の様子など、今まで気づかなかっ
た発見があるかもしれません。同じ景色を見ていても、「見よう。」と意識すると、新しいものが見えて
くるのです。

図画工作や美術の授業で作品を鑑賞するとき、「何をどのように見ればよいのか分からない。」と感じ
ることがあるかもしれません。でも、それはとても自然なことです。最初は何も思いつかなくても、少
し時間をかけて見てみると、「この形は何かに似ている。」「この風景はどこかで見たように思う。」「ど
うして作者はこんな題名を付けたのだろう。」「どうしてこの作品が気になるのだろう。」「といった考え
が少しずつ浮かんでいきます。さらに、「この作品は何を伝えたいのだろう。」「作者はどんな気持ちで
創ったのだろう。」「もし自分だったらどう表現するだろう。」「もし自分の部屋に飾るならどれを選ぶだ
ろう。」「と考え始めると、鑑賞は作品をただ眺めるだけの活動ではなくなります。自分なりの意味や考

エッセー

見えないものを見えるようにする

石崎和宏



理科解説!

シロップとジュースが上下二層にはっきり分かれる原因は、主に「密度のちがい」と「混ざりにくさ」にあります。

水の中にしずめた氷をはなすと、氷は浮かび上がってきます。これは、氷にはたらく重力よりも、水中の氷にはたらく浮力が大きいからです。物体にはたらく重力と浮力の大小関係は、物体(氷)と液体(水)の密度によって決まり、密度の大きいものはしずみ、密度の小さいものは浮きます。シロップとジュースの場合も同じで、シロップの密度は1.3 g/cm³ほど、オレンジジュースの密度は1.0 g/cm³くらいです。つまり、ジュースに比べて密度の大きいシロップは下にしずみ、その上にジュースが浮かんでいるのです。ジュースを注いで境界面が少しへこんでも、シロップからジュースにはたらく浮力の

ために平面にもどります。
砂糖は、目に見えない小さな「分子」という粒がたくさん集まってできています。水に入ると、この分子が一つ一つばらばらに分かれて水の分子と混ざります。大量の砂糖を水にとかしたシロップでは、砂糖の分子それぞれの周りに水の分子が強く結び付いた小さな粒がたくさんできています。それらが密集して動きにくくなるため、液体のねばり気が強くなっています。この結果、シロップとジュースは混ざりにくく、はっきりした境界が保たれます。しかし、液体を作る小さな粒は常に動き回っており、時間がたつと境界付近で少しずつ混ざり合い、境界は次第にばやけていきます。この粒の動きは温度が高いほど活発になります。セパレートジュースを作るときに氷でシロップを冷やすと、混ざる時間をかせいで美しい層を長持ちさせることができます。

密度……密度とは、体積1cm³あたり何gかを表し、1.3 g/cm³とは、1cm³あたり1.3gあるということです。
浮力……浮力とは、気体や液体が物体をおし上げる力のことで、浮力の大きさは気体や液体の密度と物体の体積で決まります。

えを創りだす、創造的な自己表現活動へと変わっていくのです。

このように想像力や創造力を働かせて作品について考えることは、作品と対話することでもあり、自分自身と対話することでもあります。同じ作品を見ても、人によって感じ方や考え方は違います。ある人は色の美しさに心を動かされるかもしれません。別の人は、作品に描かれた出来事や歴史に興味を持つかもしれません。どちらが正しいというわけではありません。それぞれの見方には、その人の経験や考え方が表れています。だからこそ、自分の感じたことを言葉にすることは、とても大切な自己表現なのです。

また、友達と感想を話し合うと、自分では気づかなかった見方に出会うことがあります。「そんな見方があったんだ！」と驚くこともあるでしょう。ほかの人の考えを知することは、自分の世界を広げる大切なきっかけになります。

しかし、作品を見ながら頭の中で考えていることは、目には見えません。そこで私は、その「考えるプロセス」を見えるようにするために、生成AIを使ったアプリを開発しています。このアプリでは、作品を見ながら考えたことや感じたことが分析され、「関心度マップ」として表示されます。ちょうど自動車のナビゲーションが現在地を示してくれるように、「自分はこんなところに注目していたんだ。」「いつも同じ見方をしていたんだな。」「今度は別の見方も試してみよう。」と気づくことができます。

このようなふり返りは、次に作品を見るときの新しいヒントになります。もちろん、AIが答えを教えてくれるわけではありません。大切なのは、自分自身で考えることです。

美術の鑑賞では、「自分自身の見方」を育てていくことが大切です。すぐに答えを見つける必要はありません。むしろ、分からないまま考え続けることが重要です。研究によると、じっくり時間をかけて作品を見ることで、より深く理解できることが分かっています。ところが、美術館で一つの作品を見

る時間は平均すると三十秒にも満たないという調査があります。少しもったいない気がしませんか。しばらく考えていると、あるとき突然、「もしかすると、こういう意味かもしれない。」という新しい発見が生まれることがあります。その小さな発見の積み重ねが、みなさんの考える力を育てていくのです。そして、そのプロセスで感じる戸惑いや葛藤も、大切な学びの一部になると思います。

見えないものを見えるようにする力。それは特別な人だけが持っている才能ではありません。作品をよく見て、自分の考えを言葉にし、人の話に耳を傾ける。その積み重ねによって、誰でも少しずつ育てていくことができる力です。美術作品を見ることは、作品を知るだけではありません。それは、自分自身を知ることでもあります。そして、自分とは違う考え方や感じ方に出会うことで、世界をより広く、より豊かに見るようになることができます。

見えないものを見ようとして、自分なりに考え続けることは、新しい自分と新しい意味を発見するための大切な一歩となります。その一歩一歩が、未来を豊かに生きていくための大切な力になるのではないのでしょうか。

引用文献

*「造形思考」「上」パウル・クレー・著／土方定一ほか・訳、新潮社、一九七三年、二三ページ（現在は筑摩書房から、ちくま学芸文庫として刊行されている。）

石崎和宏 筑波大学芸術系教授。美術の見方や考え方を研究し、鑑賞支援ツールを開発している。

絵 yasuo-range



みなさんは「アクスタ」を持っていますか？

アクスタとは、「アクリルスタンド」の略称です。透明なアクリル板にアニメのキャラクターやアイドルの写真を印刷するなどしたグッズです。近年は、家で専用の台座に差してフィギュアのように立て飾ったり、そのアクスタをライブ会場や飲食店や旅先など、出かける先々に持っていったりして写真を撮ることが、「推し活」の一つとして定着しています。

私は写真について研究しているので、特に、「アクスタの写真を撮る」という文化にとっても興味があります。

というのも、アクスタの写真を撮るといえるのはよくよく考えると、ちよつと不思議な現象です。アニメや漫画などのキャラクターは例外として、基本的にアクスタの写真を撮るといえるのは、「写真の写真を撮る行為」だからです。最近では、おしゃやかなカフェや、景色のよい場所、観光地などでは、アクスタを持って写真を撮っている人をよく見ます。しかし、同時に現代は、スマホやタブレット、パソコンで簡単に推しと自分がいっしょに過ごしているような合成写真も作れるようになっていて、AIを使えば、推しと自分がおしゃべりをしたりダンスをしたりする動画だって作ることができてしまいます。つまり、もし推しの写真入りの写真を作りたいのであれば、わざわざ実物の写真を持ち運ぶ必要はない

時代になっているのです。ですから、写真を「モノ」として形にするために、アクリルに印刷するなどして、いろいろな所に持っていけるようにしてあるアクスタは、実は技術の進歩には逆行したアイテムです。画像の加工も、合成も、そして生成も簡単な現代に、なぜ、アクスタを持ち運ぶという面倒をわざわざ行うのでしょうか？

その理由は、このアクスタ推し活において「写真」がどのような意味を持っているかに関わっています。おそらく、アクスタといっしょに出かけし、目的地でアクスタの写真を撮っている人は、その写真をインスタグラムなどのSNSなどに投稿するはずで、こうした投稿は、単に「パンケーキ屋でアクスタの写真を撮った」以外にも、さまざまなメッセージを持ちます。

例えば、そのパンケーキ屋がとても遠い場所にあるお店ならば、そのアクスタ写真は、目的地で写真を撮るまでの長い距離と時間をアクスタとともに過ごしたことを示します。ほかに、学校や職場、旅先、ラーメン屋、はやりのスイーツ屋さんなど、さまざまな所で撮影したアクスタの写真をSNSに投稿していたとしたら、いつでもどこでもアクスタといっしょにすることが伝わってきます。

つまりこれは、実物の写真であるアクスタを推し本人に見立てて、その推しと「いつでも・どこでもいっしょ」であることのアピールなのです。写真には撮影されていない時間も推しを肌身はなさず持ち歩き、いっしょに過ごしていること。このように、「写真を撮った写真」は、推しへの愛の重さ・深さを示すものとして使われているのです。

加えて興味深いのは、カメラを通して見たときに、手前にアクスタ、奥に自分を配置することで、まるで等身大の推しと並んで写真を撮っているかのように見えるトリックアートのようなアクスタ写真。持参したアクスタはもちろん推しの分身にすぎません。もちろん本人ではありませんが、出かけ先のフォトスポットで「自分とアクスタの二人」の写真を撮るこのトリックアートのアクスタ写真からは、



アクセスタを持ち歩くことが一種の「デート」のようなものになっていることも読み取れます。

このアクセスタの流行は、推しの加工も、合成も、生成もできる今、むしろ改めて「写真を持ち運ぶ」ことの重要性が高まっていることを示しています。

実は、写真の歴史を振り返ると、デジタル写真よりも、フィルム写真よりも、もっと前、写真が発明されて間もない一八五〇年代頃、名刺サイズくらい硬い厚紙のカードに紙の写真を貼ったもの（カルト・ド・ヴィジット）を持ち運び、交換したり集めたりすることが流行していました。人々は家族の写真を持ち歩いたり、当時の有名人や王室関係者などの写真を集めたりしたのです。このように、「お気に入りの写真を持ち歩く」という人間の行動は、写真が生まれたばかりの頃からずっと変わっていません。ただし、昔の写真とアクセスタが決定的に違うのは、アクセスタは自分の手で持って、背景といっしょに写真を撮るために作られているという点なのです。

このことから、私たちは「今がどんな時代なのか」をのぞき見ることができます。スマホ一つでどんな画像も作れるデジタル時代だからこそ、私たちは逆に、長い時間とともに過ごしたからこそ撮影できる写真を求めているのかもしれない。あるいは、合成写真や加工写真など、偽物の写真や動画ばかりの今こそ、自分の気持ちを目に見える形にできるものを求めているのではないのでしょうか。

このように写真の使われ方をじっくり見ていくと、その時代に生きる人たちの気分や願い、社会の空気が写し出されていることに気がつきます。みなさんがふだん何気なく撮っているスマホの写真も、未来の人から見れば「二〇二〇年代って、こんな時代だったんだ！」と驚く大発見になるかもしれません。

村上由鶴 写真研究者、美術評論家。写真や現代アート、人権課題に関する執筆を行う。

絵 yasuo-range

学校あるある



学校でよくある出来事を、ねこの兄弟、タマとマルが楽しくしようかします。

伊藤ハムスター

みんなの「あるある」大募集！

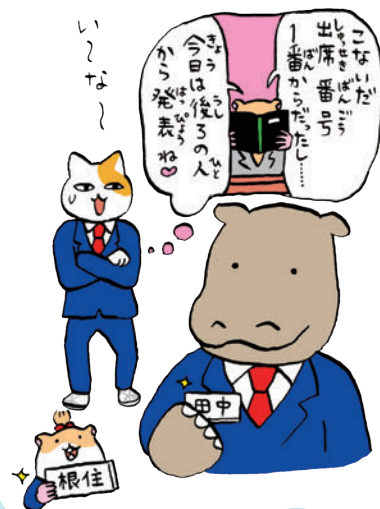
みなさんの学校の「あるある」を教えてください！
投稿はこちらから



下校中にランドセルをどこかに忘れ、ランドセル内のGPSで発見。



出席番号は、真ん中のほうが、じつせんせいおは先生に当てられない。



いつのまにか夏服を着る機会がなくなった。



インタビュー

我楽太さん

（第四回「青いスピンの」作品募集・入選）

いちばんの趣味は読書

「青いスピン」では小学校高学年から中学生を読者対象とした物語、小説を募集してきました。おかげさまで二〇二六年春に結果発表があった第四回で、ご応募いただいた作品総数は1000点を超えました。今回は特別インタビューとして、第四回で入選を果たした我楽太さんに、執筆のこと、読書のことなどを語っていただきました。



「青いスピン」第8号（2026年 春）より。
入選作はWEB「青いスピン」からもお読みいただけます。

「読む」を深めるために「書く」

入選作の「夕暮れベンチ」は、選評で「不思議な二人芝居を見ているように」「友情になる手前の空気感がおもしろい」「本当に何気ないやりとりだが、きつこういう時間を大人になって思い出す」などと言及されました。募集内容の「小学校高学年から中学生を読者対象」というのを見て、「人と人との距離感」というのが思いうかびました。最近SNSなどもあって人との距

離感が近すぎる感じがしたので、逆に遠くしてみたらどうかと思うたんです。読者対象に委に寄せていくのではなく、自分が小中学生に読んでもらいたいものを書きました。やっぱり自分を信じて自分の色を出したほうがいいかなと思いました。

自分自身、「何でも知ってる」みたいな距離感が近すぎるのがあまり得意ではないんです。知ってるようでいて全然知らないことも多いですから。転校の多い子ども時代だったんですが、人と別れて、でもまた会って、という経験をたくさん

していたので、そこは応募作とも関係しているかもしれません。

執筆にはどれくらいの時間がかかったのでしょうか。

二、三時間でしょ。書きあがった後に一回見直して細かいところは修正しましたが、直感で、連想、連想、連想で、ぱつと書きました。そういうのはうまくいかないことが多いと思うのですが、今回は運良くまとまりました。

フィクションを書き始めたのは五年くらい前からです。書き方は独学です。技術書みたいなものにも目は通したんですが、結局物語や小説は自分で書くしかありません。書いて、書いて、考えて、書き直してまた書いて、っていう感じだと思います。とにかく書き続けるしかない。

書き始めてから、何か変化は感じますか。

最初のころよりは文章はましになったとは思いますが、助詞をまちがえなくなっ

たりとか（笑）。それと、人の文章をよりにいねいに読むようになりました。読むだけだと見えないものもある。書くことは、読むことを深めるために必要なかもしれないと感じました。書くときは、リズムは意識します。口に出してみても何か変な感じがしないかとかは気にします。改行とか、読点の位置も、意識したいなというのがあります。

くり返し読んだ本

これまで、どういう本を読んできたのでしょうか。

小学生時代は家の都合で飛行機に乗る機会がけっこうあったんですが、そこでよく本を読んできました。講談社の青い鳥文庫の「十五少年漂流記」は十回以上は読んだと思います。同じ青い鳥文庫で「厳竜王」や「ああ無情」、「海底2万マイル」なんかも読んでました。ちなみに「十五少年漂流記」は人と人との付き合いみたいなものだいな要素なので、そ

の点では「青いスピン」への応募作にもつながるところがあります。

中学生のときはそれほど本は読んでないんですが、「ハリー・ポッター」や「指輪物語」、「ゲド戦記」あたりはくり返し読みました。

大学生のころからは量を読むようになりました。一年で三、四百冊は読んでたと思います。読んでない本が多いなと思うたのがきっかけで、かたっぱしから手に取りました。本に関しては食わず嫌いしないタイプで、ミステリーやSFもたくさん読みました。

作品としては中島敦の「山月記」や、古典だと「方丈記」あたりが好みます。夏目漱石も好きです。

本を読んでいると、ああ、そういうふうに見えるんだ、とか自分とはちがう視点に気づきます。ちょっとした言葉つかいでも、自分だったらどうするかとか考えるようになりました。ゲームをしたり映画を見たりもしますが、やっぱり自分にとっていちばんの趣味は読書です。

WEB 青いスピンの ご覧ください!

いつでも どこでも 読める

「青いスピン」に掲載している読み物は、全て「WEB 青いスピン」からも読むことができます。好きなときに好きな場所で読んでみてください。

お気に入りの 見つけよう

「WEB 青いスピン」では、過去の号に掲載している読み物も読むことができます。ぜひ、お気に入りの読み物を見つけてみてください。

「WEB 青いスピン」 にしかないコンテンツも

公募で佳作を受賞した作品など、「WEB 青いスピン」でしか読めない読み物もあります。ぜひチェックしてみてください。



WEB 青いスピン



(URL: <https://bluespin.tokyo-shoseki.co.jp>)
※インターネットの通信費がかかります。

青いスピン 第9号
(2026年 秋)
2026年9月1日発行



発行者 渡辺能理夫
発行所 東京書籍株式会社
印刷・製本 株式会社リールテック

本社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1
Tel:03-5390-7445(営業総機本部) Fax:03-5390-6012
支社・出張所 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666
東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581
名古屋 052-950-2260 関西・四国 06-6397-1350
広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536
鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084

ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>
東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/>



令和8年9月発行 Copyright © 2026 by Tokyo Shoseki Co., Ltd., Tokyo All rights reserved. Printed in Japan
この冊子は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

読者アンケート



第9号の「青いスピン」でおもしろかった作品や、これから取り上げてほしいことを教えてください。

表紙絵 中村雅奈
アートディレクション 山田和寛(nipponia)
デザイン 山田和寛+竹尾天輝子(nipponia)